

パステウは日系人？

内山 夕輝

(公益財団法人浜松国際交流協会)

「パステウは私たちみたい」

そう同僚が言ったのは、皆でブラジルの軽食「パステウ」を食べていた時だった。パステウとは揚げ餃子のようなもので、具を生地で挟み込んで揚げたものだ。

「ブラジル人はパステウを日本の料理だと思っているよ。でも、日本ではパステウはブラジル料理でしょ。日系人と一緒だね」と、同僚は笑いながら言った。

静岡県浜松市はものづくりの街である。製造業が多く、そこで働く外国人が多く住んでいるが、中でもブラジル国籍者は最も多い。全国的に見てもブラジル人住民数は最も多く、出入国在留管理庁の在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表では1990年以降不動の日本一である。ルーツのある人、帰化した人などを含めると、ブラジルにつながる人はいくらもいる。日系ブラジル人とその家族による集住の歴史は既に30年を経過しており、次世代、次々世代がここで育っている。彼ら彼女らは、浜松を、日本を、どんな思いで見つめているのだろうか。同僚の何気ないひとことが私の耳から離れない。

私が浜松国際交流協会に勤務し始めてから16年が経つ。これまで多文化共生を進める事業を様々行ってきたが、私自身、果たしてうまく進めていけているのか自信が持てない。また、同僚として一緒に働いている人や、仕事をきっかけに友人になった人がいるにもかかわらず、日系ブラジル人のことを心から理解できているかと問われると答えに詰まってしまう。

ある日、日系ブラジル人の友人が「これが船に乗る前」と言って写真を見せてくれたことがある。KOBE EMIGRATION CENTER と書かれている建物の前で、子供も含めた老若男女が100人位写っているモノクロの写真だった。写真の下部に「昭和35年10月2日神戸出航あふりか丸乗船者渡航記念」と印字されていることから、これから一緒に船に乗る日本人移住者の集合写真だということがわかる。私の父と母と兄と姉と祖父母。私は、皆がブラジルについてから4年後に産まれたんです」と友人は言った。この写真に写っている人たちは皆、どんな気持ちだったのだろうか。見ず知らずの人たちと集団で船に乗り込み、彼の国を目指す。出発直前の興奮がおさえきれない人もいるだろう。母国を離れて生活する不安に襲われ逃げ出したくなる人もいたのではないかな。必ず帰ってくるといふ決意を覚悟に変え、自らを奮い立たせていた人もいるかもしれない。

私が知り合う日系ブラジル人たちは、ほぼ例外なく家族の写真や手紙を持っている。祖父母や叔父叔母の写真など、自分が写ってなくてもルーツがわかるものとして大切

にしているようだ。また、皆記憶も鮮明で、写真の人物を指さしながら、「この人は叔母で、こっちは従妹」「この人はうちの農場で働いていたブラジル人」など、もれなく紹介してくれる。私は、自分の家族以外の写真を持っていないので、彼らの“親戚も家族”という感覚には驚かされる。実際、日本人が友人間で親戚の写真を見せ合う話など聞いたことがない。きっと母国を離れて生活する彼らにとって、互いに助け合う気持ちは不可欠で、親戚間の結束力も自然と高まったのだろうと推察するが、同僚が、親戚までが家族というのは日本の文化でしょと逆に驚いているところを見ると、もしかしたら昔の日本では親戚との関係が今よりもっと濃かったのかもしれない。日本人の私は日系人の友人から日本の文化を教わっている。

時には、ブラジルの日系社会が記録されたものも見せてくれることがある。相撲の巡業や、運動会、お墓参りの様子など、本人の思い出として話してくれることもあれば、家族の経験として記憶を継承している様子も見られる。私はこうした写真を見せてもらいながら、彼らの記憶や記録を聞くのが大好きで、ブラジルに移住した日本人に思いを馳せる。そして、彼らの人生をうらやましく思うのだ。

私は海外とは無縁の出自であるが、小学生位から海外に対して漠然とした憧れをもっていた。英語を習ったり、ガーナとスコットランドのペンパルと文通したりもしていたが、外国人との出会いは全く無かった。大学に入り、学生の貧乏旅行で海外を周ったことはあるが、長く滞在してもせいぜい1か月程度で、現地で生活をしたとは到底言えない。海外留学したいという憧れもあったが家庭の事情で断念した。しかし、それも自分が本気で願って行動に移していれば、叶ったのではないかと今となっては思う。若かりし頃の勇気のなさを後悔している私は、海の向こうに移住した日本人の行動力が心からうらやましく、またその生命力に憧れている。

2017年、勤務先の協会で設立35周年の記念誌を作成することになり、担当になった私は、過去の資料の中から日系ブラジル人を特集した新聞記事を見つけた（静岡新聞1995年1月3日）。「日伯国交100周年浜松に溶け込む」と見出しが付けられ、就労目的の“出稼ぎ”から、日本文化との接点を求める“定住者”として浜松の市民社会に溶け込もうとしている日系ブラジル人の素顔を紹介するとある。記事には、ブラジルと日本の二つの母国を持つ日系二世の両親と、日本語をある程度マスターし、日本で知り合った日系ブラジル人と結婚した日系三世の子供との間にある、将来の思いへのギャップが書かれていた。世代間の隔たりは今でも、そして大小どんな集団にもつきものだが、日系人の場合は日本と移住先の国の間で揺れるアイデンティティの違いもあり、親子であっても簡単には相容れない部分があることが記事からもわかる。記念誌作成のためにインタビューした日本育ちの日系ブラジル人の若者らからも、アイデンティティの揺らぎに苦悩する様子が垣間見られた。移住家族が抱える最も難しい問題の一つではないかと思う。

また、記事はその他に「私たちと日本人は同じ顔をしている。日本語ができると仲良

くしてくれるが、話せない日系人は嫌われる（中略）」と日系二世の母の声を取り上げ、移民の歴史を知らない日本人の何気ない言葉が、相手の国民性を否定してしまうことにもなりかねない、と警鐘を鳴らしていた。確かに記事にもあるように、私たちの多くは日本人の移住の歴史を深く学ぶ機会がない。なぜ、浜松市に日系ブラジル人が多く住んでいるのか、日系人と呼ばれる人たちがどんな生活をしているのか、そしてどんな思いで日本を見つめているのか。一体どれくらいの浜松市民が関心を持っているだろうか。

私は、日系ブラジル人のことをもっと知りたい、多くの人にも知ってもらいたいと思い、セメンチーニャという日系ブラジル人のママさんグループに声をかけ、日本人によるブラジルへの移住、ブラジルでの生活、出稼ぎのための来日、日本での生活を演じる寸劇イベントを行っている。2019年に初演を行い、2021年には市内の中学校1校及び協会主催のグローバルフェアでも上演した。劇の脚本、演出は全てセメンチーニャ代表のクリスチーナさんが行い、衣装や小道具はメンバーによる手作りだ。私は裏方として、演技をするセメンチーニャメンバーのサポートの他、イベントの企画や資金集めなどを行なっている。劇は、4代にわたる日系人女性の人生を描いており、ポルトガル語で演じるクリスチーナさんと、日本語で演じるアンジェラさんが二人一役で主人公を演じている。ここでもセメンチーニャメンバーらの家族の写真は大活躍で、劇の背景や、会場の入り口でのパネル展示で、多くの人目に触れるようになっている。

劇は一貫して日本人の移住のあゆみを伝えている。私は、彼らが来日する理由は出稼ぎであり、お金を稼ぐ以外の目的は無いと以前は思っていたが、それだけではないことを劇で知った。彼らの多くがブラジルでの生活において、年長の家族や親戚から日本に関する話を聞いたり文化を受け継いだりしていることがわかった。また、ブラジル社会ではジャポネス・ガランチード（信用できる日本人）とリスペクトされる日系人であることを誇りに思い、自分とつながりのある国である日本へいつか行ってみたいと憧れていたことを知った。たまたま、出稼ぎという形で来日する機会が目の前に現れ、祖父母から聞いていた「いつか日本に帰る」という思いを代わりに果たそうと思っていたことも知った。私は日系ブラジル人のことを何もわかっていなかったことを恥じた。多文化共生社会を構築する仕事をしている自分がこの程度の理解で、社会に多文化共生を求めることなどできるはずがない。

また、これが日系ブラジル人の魅力だと気づいたことがある。それは、登場人物の感情に、日本的なしっとりした繊細さと、ブラジルのなからったとした大胆さが必ず両方含まれているところである。例えば、来日する時の場面では、家族との惜別だけでなく、日本に対する夢と希望のワクワク感の両極が見事に演じられている。また、来日後には、ブラジルで聞いていた話と全然違う環境で働かなければいけなかった辛さが深刻に語られる一方で、日本のあちこちに自動販売機がある安全さに感激したり、トラックが後進する時の音声案内に感心したりする様子など、日本に対するネガティブな印象だけでなくポジティブな印象もセットで演出されている。悲劇がこれでもかと襲い、それに耐

え忍ぶ中から感動を見つける物語をついつい期待してしまう私にとっては、このポジティブさに違和感を覚え、クリスチーナさんに真意を尋ねたことがある。クリスチーナさんは、大変なことだけを見せるのは私たちらしくない。辛いこともあるけど、明るさやユーモアが私たちの側にはいつもあるんだよ。だから、それが無いのは逆に不自然なの」と言っていた。クリスチーナさんが劇のタイトルを「Brasil e Japão uma história de união ブラジル×日本融和のあゆみ」と名付けたように、日本とブラジルの間で、両国の特徴を見事に融合させた日系ブラジル人の気質が少し理解できた気がした瞬間だった。

1990 年に入管法が改正され、日系三世とその家族の長期滞在が合法化されるようになって 30 年が経過する。当時と今とを比べ、社会の多文化共生は進んでいるのだろうか。私はその片棒を担げているのだろうか。劇を見た中学生や観客の感想には「ブラジル人がクラスにいる理由を初めて知った」「(移住した日本人がブラジルで言葉が通じず買い物ができない場面を見て) 言葉が通じないのが大変だとわかった。ブラジル人に自分から話しかけてみたい」といった声が多くある。これらの感想は劇による気づきの効果とも言えるだろうが、裏を返せば、教室や職場に日系ブラジル人がいるのは知っているがただそれだけで、それ以上の情報も関心もないことのあらわれと言えるのではないだろうか。また、中には、共生が一般化して争いごとが減ったという人もいるが、本当にそうだろうか。ぶつからない代わりに交わることもなく、互いの間に溝ができてしまっているのではないだろうか。

先述の約 30 年前の新聞記事を見返しても、当時の社会の様子と今の様子の間に、残念ながら変化は感じられない。記事には、突如解雇され仕事が見つからなかったエピソードや、日本ではあくまで外国人扱いをされ日本人に与えられる保障は何もないといった制度上の問題などが書かれている。こうした制度の溝は 30 年間で少しずつ埋まってきたように思うが、心の溝はどうだろうか。争いを避けるために接触を求めず互いに関心を持たない共生社会を私たちは本当に望んでいるのだろうか。私はこの溝を埋め、友人である日系ブラジル人の魅力をもっと多くの日本人に理解してもらいたいと思っている。日本からブラジルへ渡り、ブラジルから日本へ帰ってきた彼らのあゆみを知ってほしい。二つの国の良いところもダメなところも見てきた彼らの経験に耳を傾けてほしい。まるで 2 つの人生を同時に生きているような日系人らが私たちに与えてくれる多様な視点に目を向けてほしい。なぜなら、私たちは共にまちをつくる一員なのだから。

パステウは私たち日系人のようだと同僚は言った。どちらからも異端のように思われていると感じ、心を痛めているのだろうか。どこが発祥の料理だとしてもパステウは美味しいし、私は大好きだ。そのことを同僚に伝えに行こう。パステウを食べたことのない日本人の友人にも食べさせてあげよう。私の思う多文化共生がこれから始まる。